

令和3年5月10日

学校経営計画

大阪市立真住中学校
校長 山口 博功

＜ 学校教育目標 ＞ R2から3年間のビジョン
夢に向かって「強み」が発揮できる心豊かな生徒の育成
＜ 学校園の組織目標等 ＞ R3年度の教職員が同じ方向でめざすゴール
社会に開かれたカリキュラム及び3観点評価の確立と、生徒が夢に向かって「強み」が発揮でき、地域・保護者にとって魅力あふれる学校をめざす

【 課題 】 昨年度のアンケート結果からPDCAを回すべき課題（重要順）

- ・教職員アンケートで「学校運営等に教職員の意見が反映されている」「各分掌や学年間の連携が行われ有機的に機能している」「学習指導や評価は教職員同士が協力している」「教育課題について教職員同士で共通理解」がどれも50%以下であることを重く受け止め、管理職が率先し組織を改善する中で、教職員の心理的な安全性を高め、教職員全員で互いに話し合える文化や疑問に思ったら言える環境づくりをめざす。
- ・生徒アンケートで「落ち着いた雰囲気授業を受けることができている」で、1学期平均79%から2学期平均66%と13%減少しており、1年間を通して、学年間で指導を連携する中で、教職員組織のブレない生活指導体制を構築させる必要がある。
- ・生徒アンケートで「自分によいところがあると思う」が62%、府平均68%に近づき、「将来の夢や目標を持っている」が69%で、府平均67%に近づいている。更なる自己有用感の向上をめざし、生徒が自分の「強み」を知り、積極的に発揮できるカリキュラムの改善と、自分の考えを文章で表現できる能力を育成する必要がある。
- ・不登校生徒が1年生19名・2年生10名の13%の割合であり、9月よりアシストルーム・みらいベース等を開設した結果、1年生3名・1年生4名が別室登校できている。更なる不登校生徒を生み出さない組織的なアプローチの改善が必要である。

【 重点目標 】 コロナ禍等の予測困難な社会を生き抜くための必要なスキルの育成

①年間を通じ授業規律を確保し、地域保護者から信頼される生徒指導体制の確立

1年間を通じて、学年間の連携を密にし、学校安心ルールに基づきどの学年も等しくブレない生活指導を徹底することで、地域保護者に絶対的な信頼を与える。

②生徒の自己有用感の向上をめざしたカリキュラムマネジメントの実施と運用

単元配列表を掲示し、教員全体で月ごとに教育内容を開発・精選し、探求的な学習の中で生徒が課題解決にチャレンジする中で、更に自己有用感を向上させる。

③1人1台端末の日常的な活用と、授業改善の中で文章作成能力を向上させる

疑問があれば端末でいつでも検索できるように、寛容性をもった活用をめざす。
学習内容の振り返りや評価等で、自分の考えを文章化できる能力の向上をめざす。

④多くの学校サポーターと連携した不登校を生み出さないアプローチの評価改善

1年生の不登校は2学期以降に急増する傾向にある。アシストルームやみらいベース等の運用を教員全体で試行錯誤する中で、不登校生徒の割合5%以下をめざす。

⑤地域・行政・学校が協働で創る防災教育の構築と人権教育の整理と学びの再構築

浸水被害の可能性が高い地域の要望を受け、生徒の防災意識の向上を地域と考える。
既存の人権(同和)教育を整理し、教員全体で持続可能な探求的学習に再構築する。

⑥地域やPTAと協働し、学校の可視化による魅力あふれる学校づくりの確立

地域やPTAの方々と教職員が、授業や行事などを通じて協働する中で、コミュニティを広げながら、HPなどを通じて生徒や教職員の頑張りを可視化する。